広報ただみ診療所

朝日診療所
医師　森（もり）　冬人（ふゆと）

「医療・福祉に関心がある次世代へ」

新型コロナの流行から１年以上になりました。世界中で活躍する医療・福祉関係者を見て、医療・福祉の仕事に関心がある小中高校生、両親・祖父母の方も多いことでしょう。

医療・福祉の仕事も色々あります。今年４月には福島医大保健科学部が開設され、県内で学べる分野・専門職も増えました。近年、医療・福祉の大学・専門学校では地域で多職種連携を学ぶ事が重要視されています。高齢化のため慢性の病気や障害を持つ人が増えており、医師・訪問看護師・保健師・薬剤師・リハビリ専門職・介護施設などが協力して、様々な病気・障害を持った人を地域で支援できるように学生時代から学ぶ事が求められています。医学部で言えば、私の学生時代、地域の診療所の現場実習はたった２日間が義務でした。今は最低１週間。今後は１ヶ月以上と、医学生もこれまでより地域の診療所で勉強する事が最新のトレンドです。

医療職も２つの専門家が必要です。高度な医療に特化した専門家と、地域で包括的な医療を提供する専門家です。

まず大病院で高度な医療に専念する人。例えば心臓手術をする外科医、ドクターヘリに乗る看護師、人工心肺装置を動かす臨床工学技師などです。特別な医療に特化した技術が求められます。

もう１つは、小病院・診療所・施設・役場で住民に身近な医療を包括的に提供する専門家。私のような総合診療医・家庭医の専門医、訪問看護師、役場の保健師、施設のリハビリ専門職（理学療法士・作業療法士）などです。幅広い技術や知識が求められ、よりコミュニケーションスキルの学習が必要です。病気を治すだけではなく、健康増進・予防、病気を持つ人への生活支援やリハビリ、癌患者への在宅ケア・緩和ケアを学ぶ事も重要です。

２つの専門性のある医療職が協力して良い医療が成立します。次世代を担う皆さんは色々な仕事を調べてみてはどうでしょうか。コロナが落ち着けば、診療所や町役場で受け入れる医学生・看護学生の実習は更に増える時代になりそうです。私も福島医大の非常勤講師として次世代の医療・福祉職の育成に貢献します！

地域おこし協力隊として Vol.76

移住コーディネーター
生天目（なまため）　博（ひろし）

「移住コーディネーターの実感と予測」

国内屈指の豪雪地帯である只見町、雪が融け田植えの始まる５月から初雪が降る１２月まで自然豊かな環境で暮らし、冬は都市部へ戻るライフスタイルなら、両地域のメリットをフルに享受できる。これが二地域居住という考え方。只見町に暮らす時間がたとえ３日であろうと半年であろうと、二地域居住がもっと気軽に安易にできれば、人はやって来る。これは移住コーディネーターの実感。

コロナ禍でデジタル技術を駆使したテレワークが普及し、一定期間地方で暮らす二地域居住をより身近にしたのは間違いない。まさに５０年かかると言われた社会変化が、ここ数年で起きた。だが実際に二地域居住を始めようとすれば「どこで？」、「費用は？」、「何から始める？」と言った課題を解決しなければならない。実は、これが障害となって身近なレジャーや国内外旅行へ流れたのではないかと感じていた。ところが新型コロナウイルスの蔓延をきっかけに、いま多くの人が「本当に価値あるライフスタイル」、「人生を豊かにすること」とは何かを探り始めている。

二地域居住はテイクオフ期に入った。まさに飛行機が地上を離れ、上昇態勢を取るかのようだ。大胆に予測してみたい。近い未来、二地域居住を考える人たちが気軽に安価で二地域居住できる施設や制度を整える組織、地域が現れる。必要な情報がすぐに手に入り、手続きはダイアログボックスとわずかなクリックだけで完了する世界になる。

人の不便を解決することがビジネス（社会利益）につながる、自分はそう考えている。